



TITLE:

古代末期シリアの解釈学 - ニシビスのエフライムとヨアンネス・クリュソストモス (Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

武藤, 慎一

CITATION:

武藤, 慎一. 古代末期シリアの解釈学 - ニシビスのエフライムとヨアンネス・クリュソストモス. 京都大学, 1997, 博士(文学)

ISSUE DATE:

1997-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202128>

RIGHT:

氏 名	む とう しん いち 武 藤 慎 一
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 74 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 宗 教 学 (キ リ ス ト 教 学) 専 攻
学位論文題目	古代末期シリアの解釈学 ——ニシビスのエフラ임とヨアンネス・クリュソストモス——

(主 査)
論文調査委員 教 授 水 垣 渉 教 授 吉 田 和 彦 助 教 授 芦 名 定 道

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、古代末期のシリアの解釈学を、ニシビスのエフラ임 (Ephraem of Nisibis. c. 306—373) とヨアンネス・クリュソストモス (Ioannes Chrysostomos. c. 349—407) の比較研究を通して考察し、シリアの解釈学がアンティオキア学派の解釈学と異なる独自性を有することを明らかにしようとするものである。本論文は、序論、第一章「エフラ임の解釈学」、第二章「クリュソストモスの解釈学」、第三章「エフラ임とクリュソストモスの解釈学」、及び結論から成る。

序論第一節では、聖書を中心とした古代キリスト教の解釈学についての研究史を概観し、その問題点を指摘するとともに、論者がとる方法を提示する。古代末期シリアの解釈学の研究における最大の課題は、ギリシア教父 (アンティオキア学派) とシリア教父の解釈学の関係を解明することであるが、従来の研究は、この点についてなお成功を収めていない。その理由は、次の三点にある。第一に、「字義的解釈」と「比喩的解釈」という伝統的枠組みが、シリアの解釈学にたいしてもあたかも自明のことのよう適用されてきたこと、第二に、アンティオキア学派については、モプスエスティアのテオドーロス (Theodoros of Mopsuestia) に研究の比重があまりにかかり過ぎていること、第三に、シリア教父を代表するエフラ임の解釈学がその方法上の類似のみを根拠として、アンティオキア的と見做されてきたこと、である。このような問題点を解決するために、論者は次の四つの方法論的視点を採用する。第一に、シリア教父の解釈学の特徴を把握するためにレトリックにおける概念を適用すること、第二に、アンティオキア学派の解釈学の代表としてクリュソストモスを取り上げること、第三に、アンティオキア学派の解釈学にとどまらず、解釈それ自体を問う、思想としての解釈学を研究すること、そして第四に、エフラ임とクリュソストモスとの比較を可能にする具体的な接点として、両者が共に強調する、神人関係における「適応」の問題に注目すること、である。

序論第二節では、古代末期シリアの解釈学の背景を、主に言語文化的視点から概観する。まずシリア及びシリアキリスト教の歴史を概観した後、シリアにおけるシリア語世界とギリシア語世界との関係の問題

を論じる。シリア文化とギリシア文化とは相互に影響を及ぼしながら存在していたが、その影響の程度は地域によって相当異なっていた。このような状況下で、同じシリア出身でありながらシリア語しか話さなかったエフライムと、ギリシア語しか解さなかったクリュソストモスとの関係はどのようなものとなるかが重要になってくる。ここで論者は、この関係を解明するために言語と結び付いた思惟構造の問題が提起されると主張する。

序論第三節では、思想としての解釈学を解明しようという本論文の方法を理論的に基礎づけるため、現代のレトリックや解釈学の理論に触れ、とくに提喻、隱喻、換喻というレトリックの概念の有効性に着目する。これにより古代末期シリアの解釈学の思想的意義は、従来よりはるかに大きく認められることになる、という。

第一章第一節では、エフライムの生涯と著作とを概説する。第二節では、エフライムにおける神認識の可能性の問題についての従来の研究、とくにベックの研究を批判して、神認識が神と人間とが共に主体となる交互的循環的關係に基礎づけられていること、そしてこの関係における認識は、聖書によって限界づけられていること、したがって聖書解釈と神人関係の理解とを関連づけて把握する必要があることを明らかにする。第三節では、エフライムが神人関係を、具体的には、神の下降と人間の上昇とにおける両者の「適応」(etrken)として理解したことをテキストの詳細な分析によって示す。神は、その下降の全行為において適応し、全被造物は神の「秘義」、すなわち「象徴」(râzâ)となる。エフライムの適応論の中心は、象徴論であり、かれの解釈は、「象徴論的解釈」である。

第二章第一節では、クリュソストモスの生涯と著作とを概説する。第二節では、クリュソストモスにおいて、神は自らを人間に「適応」(synkatabasis)させるがゆえに理解可能であるが、その本質は把握不可能である、といわれる場合、神理解の可能性と不可能性との関係は、いわば神の不適応にも正しくかわることを含みうる「対応」の概念によって説明されるべきことを論じる。第三節では、クリュソストモスにおける神の下降と人間の上昇との関係の解釈学的意味を論じる。人間の神理解は、神の下降と上昇の運動によって人間が上昇することである。神は聖書と歴史において人間を上昇させようとしたのであるから、解釈はこの連関を把握することにほかならない。クリュソストモスの解釈学は、この意味で「連関的解釈」を中心としている。

第三章第一節では、エフライムとクリュソストモスの解釈学の類似点と相違点を論じるための新しい視点を研究史を踏まえた上で提出する。第二節では、その視点として、表象と言語、あるいは視覚と聴覚の問題を取り上げ、エフライムでは視覚的要素が強く、具体的表象が重視されていることを明らかにする。第三節では、クリュソストモスにおける表象と言語を検討する。かれの場合には、聴覚的要素が強く、抽象的観念が重視されている。第四節では、エフライムとクリュソストモスとの比較から、両者の解釈学の相違は具象性と抽象性との相違に帰着することを論じる。エフライムにおいては表象と言語とは一体であり、表象の具象性が保持されているが、クリュソストモスにおいてはそれらは分離可能で、表象が観念化される傾向にある。このことは、言語文化的にはアラム(シリア)的思惟構造とギリシア的思惟構造との相違を意味する。

結論として、論者は、シリア教父とアンティオキア学派の解釈学には本質的に大きな相違があると主張

する。シリア教父を代表するエフライムの解釈学の核心は、堅固にシリア的であり、これを従来の研究のようにアンティオキア学派的とするのは誤りである。これにたいしてアンティオキア学派を代表するクリュソストモスの解釈学は、ギリシア的な特徴を示している。そして論者は、前者を換喩的、後者を隱喩的と特徴づける。以上の考察によって、古代キリスト教の解釈学は、これまで研究者が考えてきたよりも多様であり、少なくともシリアの解釈学の独自性が認められねばならないことが、結論づけられる。

論文審査の結果の要旨

従来、古代キリスト教思想の研究は、ギリシア及びラテン教父を中心に進められてきたといつてよい。シリア教父は、ギリシア・ラテン教父の脇役の位置を占めるにすぎなかった。しかしキリスト教は最初期以来、西方と東方の接点をなすシリアのアンティオキアを伝道の最も重要な基地として発展してきたのであり、多くの重要な思想家もここから輩出した。この地に流通していたギリシア語とシリア語は、ラテン語とともに古代キリスト教の思想形成に最も寄与した言語である。シリア語による文献の量も、ギリシア語、ラテン語による文献に次いで多い。それにもかかわらずシリア教父の研究が遅れているのは、キリスト教の西方への展開をその主流と見做し、シリア教父をも西方に引き付けて解釈しようとした先入見による。これに疑問を抱いた論者は、セム語に属するアラム語のエデッサ方言であるシリア語による思想と印欧語であるギリシア語による思想との間に存在する相違が、通説よりも大きいことを明らかにしようとする。そこで論者は、ともにシリア出身でありながらシリア語しか話さなかったニシビスのエフライムと、ギリシア語しか解さなかったヨアンネス・クリュソストモスを取り上げ、両者を比較することによって、エフライムが代表するシリア教父の独自性を示そうと試みる。本論文は、研究史及び論者の方法を詳細に論ずる序論に始まり、エフライムの解釈学を解明する第一章、これに対応してクリュソストモスの解釈学を扱う第二章、そして両者の比較を行う第三章、及び結論、からなる。

本論文の著しい成果として、以下の諸点があげられる。

1. 研究史を十分踏まえた上で、エフライムとクリュソストモスの比較という、これまで取り上げられていなかった新しい視点と方法を開発したこと。両者をそれぞれ別個に考察する場合には見えなかった、古代キリスト教の解釈学における重要なテーマのいくつかを、両者の対照から浮かび上がってきたことは、論者の視点と方法の有効性を確証している。
2. エフライムのシリア語原典に即して、神人関係を神の下降と人間の上昇という形での両者の「適応」(etrken)として理解したところに、かれの象徴論的解釈が成り立つ根拠があることを示し、従来のエフライム研究に新しい見解を加えたこと。
3. これまで数多くの研究が積み重ねられているクリュソストモスにおける「適応」(synkatabasis)の問題についても、聖書解釈との関係を明らかにするだけでなく、さらに表象と言語、あるいは視覚と聴覚の関係といった視点に立って解釈学のレベルの問題として論じたこと。
4. エフライムとクリュソストモスとの比較によって、エフライムの表現における視覚的要素と具体的表象の優越と、クリュソストモスにおける聴覚的要素と抽象的観念の重視という対照的な差異を明確にしたこと。

5. この差異がシリア的な解釈学とアンティオキア的な解釈学との区別を要請し、したがってエフライムをアンティオキア学派に組み入れることは誤りであることを実証したこと。
6. 古代キリスト教思想をその解釈学を中心として、アレクサンドリア学派、アンティオキア学派及びシリア学派の三つに類型化することを提案したこと。

以上のように、本論文は、いずれも文献の量が多いことで知られるエフライムとクリュソストモスのテキストに取り組んで、今も古代キリスト教思想を解釈する際の拠り所となっている定説に挑戦した意欲的な研究である。ことに、シリア教父の原典による専論は我が国では、本論文が嚆矢をなす。この点で論者の能力は高く評価される。

しかし、本論文は意欲的な研究であるだけに問題点も少なくない。エフライムについてもクリュソストモスについても、かれらの前後の思想家とその思想的伝統の歴史的関係において十分考察されているとはいえない。それゆえ、たとえばエフライムのシリア的な特質の解明も、シリア教父あるいはシリア的思惟の特質として一般化するにはなお不十分であろう。現代の解釈学や修辞学の理念や概念について論者の知識は豊かであるが、これらを個別のテキストの解釈に適用する場合には、論者はややもすると性急であり、また明快を欠く。

このような難点を含むとはいえ、このテーマにかんする龐大な二次的文献にも目を通した上で新しい解釈を打ち出した論者の功績は大きい。シリアの解釈学の独自性について論者が見いだした端緒が、今後より実証的に展開されることが期待される。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1997年2月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。